

座談会

シーニックバイウェイ北海道の挑戦 ～今後の地域展開への期待と展望～

北海道の雄大な自然環境や資源を生かし、地域発案での地域と行政との協働による「美しい景観づくり」「活力ある地域づくり」「魅力ある観光空間づくり」に取り組む「シーニックバイウェイ北海道」は、本年3月から正式にスタートしました。平成15年からモデルルートにおいて、地域内でのコミュニケーションから始まり、さまざまな活動や活動の広域化・連携を目指した集中活動月間の展開、ルート提案に向けた運営活動計画の作成などの経緯を経て、制度と実際の活動が充実し、現在に至っています。

本年5月には支笏洞爺ニセコ、大雪・富良野、東オホーツクの3ルートと、函館・大沼・噴火湾、釧路湿原・阿寒・摩周の2つの候補ルートが指定され、指定ルートにおいては、本格的に民間活動団体や住民、行政機関が連携し、さまざまな取り組みが進められています。また、7月には、これらの取り組みの持続的な推進・普及・発展を支援することを目的とするシーニックバイウェイ支援センターも発足しています。

この座談会では、試行段階から実際に活動されてきた活動団体の方々、制度検討の中心となった有識者の方から、取り組みへのきっかけ、活動団体や住民の意識変化と課題、今後の地域展開への期待と展望を語っていただきました。

出席者

- 石田 東生 氏 筑波大学大学院教授
(元北海道におけるシーニックバイウェイ制度導入モデル検討委員会委員長)
- 古谷 和之 氏 ニセコ羊蹄再発見の会WAO理事長
- 菅野 順二 氏 深山峠観光開発振興会
- 高谷 弘志 氏 オホーツクホーストレッキング研究会会長

コーディネーター

- 奥平 聖 氏 国土交通省北海道開発局開発監理部次長
(シーニックバイウェイ北海道推進協議会幹事長)

奥平 平成14年度の北海道開発の重点政策に初めて「シーニックバイウェイ北海道」という言葉が出て、15、16年度にニセコ周辺と富良野をモデルルートに地元のご協力を得て試行、それを踏まえて、石田先生に制度設計をしていただき、この5月に第1回目のルート指定の運びとなりました。地元の皆さんに主役になっていただいで、北海道を元気にしたいという思いから始めましたが、おかげさまで今、非常に注目をあび、北海道から全国に情報発信できる内



容にまで育っています。

今日は、あとに続く人たちに対してこれまでのプロセスでどういったところに苦労があったのか、あるいはそれをどんなふうにして解決したかという苦労話、将来に向かっての抱負など、また、学識経験者の皆様、それから行政、地域企業が連携して一緒にやりたいことや必要とされるサポート、主にそういった3点を意識してお話していただきたいと思います。

まず石田先生から、モデル検討委員会での議論や活動についてお話をいただきます。

ポテンシャルを活かして北海道で壮大な実験を

石田 以前から、北海道は日本全体のために貢献



できる自然と人のポテンシャルをもった地域だから、実験的な、面白い、新しいことを何かやりまわりますと呼びかけていました。それがシーニックバイウェイという

形で実現したことがとてもうれしい。

2年前のモデル検討委員会発足当時は、日本全体としては美しい国づくり、協働型・参画型の道づくり、観光振興をどうするかというようなことが非常に大きな問題になっていました。それに対し、「シーニックバイウェイ北海道」の、地域が主役になって、行政は黒子に徹し、北海道、地域を元気にするというコンセプトで、その中心にシーニックをおき、景色、文化、歴史、自然などの地域資源を結び、地域主体でいろんな人がいろんな形で連携しながら元気いっぱいやっていこうという取組みはぴったりだと思いました。

当初は、「シーニックバイウェイ」というカタカナ言葉は不評でした。なぜ日本語を使わないのかということですが、いろんな人がいろんな想いでこれに手を挙げてくださっている。新しい言葉でいろいろな想いを受け止めたいということで、シーニックバイウェイというカタカナ言葉にこだわってみようじゃないかと進めてきました。

奥平 各ルート代表の方々から参加の動機についておうかがいします。

提案型ではなく、地域主体の実践型

古谷 エリアというよりは活動団体としての動機

ですが、一つ目は、シーニックの説明会で地元の私が一番ハッと思ったのは、地域外の人から、こんな観光資源があってこんな自然があるいいところなのという指摘です。私たちが普段あまり意識したことがない言葉に、そういう可能性のある地域ならやってもいいのではないかと誘発されたこと。二つ目は、これまでも地域おこしや町おこしをやってきた人は多いのですが、提案型が多く、自分で本当に汗を流すとか、自分でやる機会があまりなかった。それがシーニックバイウェイ



にはあるということ。三つ目は、経済的にも疲弊して、未来が描けないこのとき、どんなメニューでもいいから飛びついてみよう。その三つが大きな動機です。

町長主導の現状打破

菅野 シーニックバイウェイの説明を聞いたうちの町長がぜひやりたいということで町役場の担当者にげきを飛ばしていたこと。もう一つは、私たちが花を植えていた「花人街道237」という道



が主でやっていた活動が尻すぼみになり、国道に花を植えたいということでシフトしつつあったこと。途中で抜けてもいいからエントリーだけはしてみようというのが動機です。上富良野町からはルート最多の4団体がエントリーしています。

シーニックバイウェイの中身は、実はわれわれも住民も分からず、今も試行錯誤です。

広域的に動く組織と

面白い東オホーツクのブランド化

高谷 中身は分からなくても、これまでの日本や北海道の既存の組織とは違い、地域の観光組織とも違って広域で動けそうだなと感じました。

オホーツク（網走支庁）は行政単位で26市町村、あまりに広すぎてそれを一緒にマネジメントするには無理があるのではないかと、そこで斜網（斜里網走）をひとくくりにして、その資源を有効活用する東オホーツクという新たなブランドづくりの活動を始めていたところでシーニックに出会い、これだと新しい町おこし、新しい地域力を高めるための仕組みができるのではないかと、面白そう。今までだと自分たちの思いを実現できそうにないけれど、こういうわけの分からないものだと、逆にできるかもしれないと思いました。1年前から本格的にやろうということでしたが、途中からではちょっと無理という話で、正式には去年9月に連携会議を立ち上げました。今までの町村単位の地域振興や観光振興では物足りないという気持ちとちょうどうまく合ったという感じです。

奥平 ありがとうございます。実は行政サイドの変化の方がひょっとしたら大きいのではないかと気がします。最初は私たち開発局の出先機関

も含めて、認識なり、力が本当に足りなかった。それが今はずいぶん変わり、むしろ自分の管内には卵すらないと焦って一生懸命卵探しをしているぐらいです。

やりたい人がやり、他の人は足を引っ張らない

奥平 さて、各ルートでは多くの活動団体が参加されていますが、これまでやってきた中でどのように変わってきたか、あるいはどうマネジメントされてきたかをおうかがいします。

菅野 これまでは基本的には行政から提案されたものをこなしていくというやり方が主でしたが、シーニックではあくまでも地域が主体的に提案していかないとプロジェクト自体が動かないことです。個別の見識を持つ個々の活動団体をどう融合させ、連携させるかというところが変わってきました。私どものルートでは、各分科会からの代表者で運営委員を形成、その多種多様な個性派が月に2回から4回一堂に会し半日かけて議論し、建設的な意見でないマイナス思考の話題はすぐ却下というやり方です。賛同できなくても反対はしない、足を引っ張らない、ということが暗黙のルールとして出来上がってきたと思います。黙っていても人の批判をしない、悪口も言わない、言いたいことがあれば本人に直接言うようになった。いろんな認識の人たちがいますから、あくまでも興味のあることを楽しくやってもらうことが第一。あとの苦労は、やりたいことと資金。自主財源をどう作るか、経営的な観点からどう運営していくのかというところが、今の一番の苦労でしょうね。

奥平 あまりマネジメントしようとしないう方がいいのではという話と、やりたい人がやって、他の人は足を引っ張らないというのも目からうろこのような話だったですね。

シーニックへの認知がプライドに

古谷 やっていることについて、周りの人や行政、特に身近に接している役場、そのへんの理解を得られることも、活動に対する栄養源です。そういう意味では、去年9月の活動月間が、私どものエリアでは大きな転機でした。あれで地域の人もこういう活動なんだとおぼろげながら感じ、シーニックバイウェイが世間で認められた時なのかなと感じています。あれ以降はなぜかうまくいっています。例えば、会社でシーニックといえば、あ



あ一生懸命やっておいでというような感じで。汗もかいたし、血も流しました。その代わりに、誇りをみんな身につけたようです。活動団体同士の連携なんて、私自身も考えていなかったシライバルとしか思っていなかった。それがだんだん世間に認知されて、自分自身のプライドになると、自分を殺して違う団体とも歩み寄れる余裕が出てきました。それが大きな変化です。

ボトムアップではなく、役員会のトップダウン

高谷 私どもは、半年ぐらいで一気に立ち上げてから動き出したので、他のモデル地区と違い、ボトムアップじゃなく、上からという形で役員会を中心に動いてきたのが実態です。したがって、活動団体メンバーがみんな中身を知っているとは思いません。もともとぼあっとしてわけの分からないところが面白いところで、自分たちで形を作っていく楽しみの方が多いと思っています。だから苦労はあまりない。活動団体も35団体にもなっているとは思っていませんでしたが、それぞれの活動をお互いに知り合うだけでも大したもの。まったく隣のことを知らないのが、ある日突然、隣町の活動が見えてきて、私も行って参加してみるかということができるだけで十分と思います。活動があるという情報を流して、できる人がやるということで、参加の強制はしません。

それからやはり、世の中に認められ、名前が売れてきたということはすごく大きいと思います。それには行政も広報も含めたバックアップの力が大きい。今はシーニックという言葉で行政も周りも理解を示すので、自分たちがやっているシーニックという言葉が一つのバッジのように輝いて見え始めたなという感じがしています。

草の根民主主義が大前提の「草を育てる種」

奥平 委員会では相当紆余曲折があって今の形になったわけですが、石田先生から制度設計の苦労話とこれがおすすめでというをお願いします。

石田 最初は活動団体が本当に手を挙げてくれるのかという不安がすごくありました。また、地域のなかでも根っこうにある思いは同じでも、アプローチや活動内容が違うということがありますから、行政と地域の方とで本当に会話ができるのだろうか、コミュニケーションできるのだろうかという懸念もありました。しかし、そこは最初に住み込み状態でリソースセンターが実によくやってくれた。活動団体も、開発局も本当に頑張っていた。そのときに重要だなと思ったのは、活動団体への支援をどうするか、その支援も単に金銭的なものだけでなく、一緒に悩むという、そういう支援のあり方を追求できたことで、今の形があると思っています。一緒にやりたい人はこの指とまれの公募方式をとったということが、今の自由で活発ないい形になっているのだろうと思っています。

ただ、まさにスタートしたところで、一部の方に相当な負担がかかっています。そういう意味では、これからの支援のあり方を真剣に考えていかなければならないだろうと思います。そこで、古谷さんと一緒にアメリカで見聞した支援の形はスマートでいい参考になると思います。

アメリカのシーニックバイウェイでは、道づくりとか、まちづくりに対するコミュニティも本当のコミュニティからの試みであり、草の根民主主義のプロジェクトだという考え方のもとで、草を育てる種、「シードグラント」の補助金を渡しています。無条件でもらえるわけではありませんが、いい発想のプロジェクトに対しては補助金を出し、それを地域が自由に使い、それが見事に転がっているという気がしました。支援センターが有限責任中間法人として立ち上がりましたが、その活動のあり方が残された仕事かもしれないと思います。

無理をしない、サステイナブルがキーワード

奥平 新しい難しいことをやる時、無理をしない、サステイナブル（持続可能な）がキーワードです。自分がやりたきゃやればいいというスタンスは非常に大事だと思います。アメリカのシーニッ

クバイウェイでの自己診断の最初の問いは「楽しんでいるか？イエス、ノー」です。

高谷 とにかく無理をしないというのが私たちのスタンスですから、10年かけてもいいというぐらいの気持ちでいます。だから逆にいうと楽しいです。私はスローライフを楽しむために網走に移住



してきましたが、関係する団体は35団体あり、毎週何かに参加させてもらっていますからスローライフとはかけ離れて忙しいです。でも、お会いする方がたくさん増え、これは楽しいです。そうはいっても、活動には資金が必要です。せっかく連携したんだから、将来の地域の連携したコミュニティビジネスにつながるようなものにしてほしいと思います。

また、今まで個々ではまったく見えなかったものが、活動によって他の人に見えてきて、人から認められたり、分かってもらえる、それは楽しいことです。

古谷 地域懇談会をやるといったら、一週間前から憂鬱になります。でも終わったときの充実感がすごい。それはやはり好きなことをやっているの、強制されていないんだということでしょう。また、ボランティアでゴミ拾いを何回かやって思ったのですが、やる前は義務でやるものだと思いましたが、やってみると楽しいです。小さいゴミまで捜し、こんなを見落としてとか、そして今だったらこここのこの地形ではここにある、人よりいっぱい集めようとか考えて楽しんでいる。視察の方にみんな自慢げに話していました。あれは自分のやってきたことへの誇りとかそういうものではないでしょうか。

ボランティアとビジネスの境界が

少しあいまいになってきているから楽しい

菅野 本当に好きなことでは、自分の思いが具現化することのプロセスが楽しい。お金があればどんな事業でも短期間でできてしまう。お金がなければ、時間をかけてゆっくりやれば必ず実現する、無理しないでやってくださいとお願いしています。ただ、私たちのルートでは、例えば一つの事業を個人的にやっている方がこうしたなかで知り

合った経営者の方と横つながりで連携し、違った形でビジネスが発生してきているというのがいくつかあります。皆さんとお付き合いすることが自分の身にも返ってくる。それで自分の思いが具現化できる。ボランティアとビジネスの境界が少しあいまいになってきているから楽しいのかなというところまで少しは出てきました。それでもう一つは、今まで小さくその地域だけでやってきた活動が広域になったために、自分たちにはないツール、例えば情報発信とか、運搬、人の動員力だとかが連携によって容易に手に入るようになったことが大きな変化ですね。ですから、みんなが逆にあせりすぎていて、自分の思いを早く具現化したい、シーニックによれば早く具現化できるんだという錯覚が出てきて、抑えるのがつらい。

広域的な情報発信と地域資源の再発見

奥平 苦労もあるけれど、それなりに楽しんでおられるようですね。メンバー以外の参加者の評価や北海道観光に欠けるといわれるホスピタリティの醸成につながるエピソードがあればお願いします。

高谷 私たちのエリアでは知床が世界遺産に指定されたのですが、それだけでは一極集中で駄目になってしまうのではないかという不安が私たちの心の中にあり、広域的なシーニックはまさに適切な取組みだと思います。そこで、ビューポイント探しツアーをやりましたが、地元の人ですら全然知らないことがたくさんある。まさしく地元にも再発見です。ましてそれは当然管外の方は当然知らないわけですから、今までのガイドブックにないところに来て地域の声を聞いて、地域を味わったということが楽しいんです。「東オホーツクシーニックマップ」もシーニックでできたのです。今までは町村単位ですから、広域でああいう情報を落とし込んだものはすごく評価が高いと思います。

菅野 うちのルートは旭川から占冠まで一本道で、一日で回れる観光エリアです。旭川から美瑛、美瑛から占冠まで、広域エリアの観光連盟や観光協会が個々に広域マップを作り、なおかつ市町村単位のマップもある。マップの多さでは道内でも有数。それは全部公益的な資金で作られている。私たちは、観光客の視点からは1枚でいい。資金もその半分でできるのではないかという提案を今

後はしていきたい。活動範囲が広すぎるのも欠点の一つかもしれませんが、ネタをいっぱいくれる人が出てきているというのも外部からの評価かもしれません。

地域の人が笑顔でいないと観光客も面白くない

奥平 一生懸命やっているけれど、お客の立場にあまり立っていないことが広域的には見えてくるということですね。

石田 私自身楽しい。このプロジェクトに参加してから、地域の団体の方と深い知り合いになっています。私自身にとってもいい財産になっているし、皆さんと話すことが楽しい。楽しくないと長続きしませんし、地域の方が笑顔でいないと観光客だって来ても面白くないという気がする。地域の方が歯を食いしばって苦しい顔をしていたら、来た人だって暗くなります。そういう効果は非常に大きい。最近よく使わせていただいているのは「シーニックバイウェイとはワッショイ」だと。いろんな人が楽しみながら自分たちの味を出してそれが一つの形になっていく、盛り上がりながら一つのところに納まっていく、楽しいお祭りです。楽しむことがシーニックバイウェイの長続きする一番大事なことだと思います。

それぞれの挑戦

奥平 今まではモデルルートが2つだけでしたが、今度は3ルートに候補が2つです。卵がひよこから親鳥へと、シーニックバイウェイルートがどんどん増える。私は北海道全域をシーニックバイウェイで埋め尽くして、北海道人はどこにいても参加できるルートがあるようにしたい。「静岡県といえば富士山」、「北海道といえばシーニックバイウェイ」と全国に普及させ、東アジアやヨーロッパ、オーストラリア、世界中からも、北海道のバイウェイを見たいといわせるようにしたい。「夢はでっかく、活動は地道に」です。

菅野 われわれのこれからの挑戦としては、モデルのときから引っ張ってもらっていたリソースセンターからの脱却で、そうしないと自主性がなくなっていくのではないかと思います。個々の活動団体は自主的に今までどおり自由にやっていただく。われわれは分科会自体の強化を図る。分科会をまとめ上げる運営事務局の資金も含めた強化、事務局がリーダーシップを持って永続的にやれる組織化をするため、法人格にしていく。組織的に

自主財源を作る手法、今年は記念切手を作ったが、今後は公的、公益的な事業は助成を受けながら一緒にやっていけば、多少の資金は調達できるだろう。三つ目は、スポンサー探しも含めて、当ルートの基金を設立できないだろうか。その基金は出資者には金利をつけて返してもらおう。ただし、プロジェクトに対しての初期部分の資金調達しかない。これから2年から5年ぐらいの間に実現させたいと活動しています。

また、7、8月は一番忙しい時期で、人が集まらなくて何もできない。行政側から見るとこの時期やるべきことは多々あると思いますが、われわれとしては行政のタイムスケジュールでなく、われわれのルートの特異性を残したタイムスケジュールを確立していこうと考えています。

古谷 私たちのエリアは支笏湖、洞爺、ニセコと三つに分かれていて、それぞれ特徴があり、よく分けてくれたと思います。去年、ニセコで事業をしているオーストラリア人に出演してもらい、巡回の広域連携フォーラムをニセコ、洞爺、支笏湖で開催し、非常に反響がありました。要はニセコだけではパイが小さい。スキーを10日間もやるわけがない。温泉にも行きたいし、札幌にも小樽にも行きたい。その中に洞爺とか支笏湖にも分散できる選択肢を入れる。実際にはもう動いている。各地域が持ち味を生かして融和させ、補いあえば、今後は自然に連携の役割を果たす。利害や生活が絡んだ連携というのは一番強いと思います。そのために、個々の活動団体が汗を流し、自分で快感を感じ、プライドを持って地域連携することを目指しています。

高谷 候補ルートの釧路湿原・摩周・阿寒は、東オホーツクルートに隣接している地域です。個人的な考えですが、組織を固めるとか形を作るよりは、むしろいつでもドッキングできるアメーバーのような軟体でいたい。釧路湿原・阿寒・摩周ルートが立ち上がれば、うまく一体化して、世界遺産の知床と、釧路湿原・阿寒などの国立公園・国定公園を含めたものすごい財産になり、東北北海道というイメージができると思っています。これができれば、今ある行政の垣根をも越えられるとわれわれは思っています。そのためには、あまり東オホーツクだけだがちがちに固めてしまわない方がいいと感じています。

これから新しく出るルート地域には、人的支援も含めてどんどん応援したい。例えば女満別空港からウトロまで、車と自転車と馬車と歩きで2泊3日くらいの実証実験のような事業も考えていますので、阿寒地区と組み合わせて一体化すると片道ルートじゃなくてグルッと円が描ける。東北北海道という大きなブランドづくりになり、こんなものは世界にもないと思います。

奥平 確かに東オホーツクの指定の絵を見ると、知床半島がまっぷたつになっていて違和感がありますね。実際には、羅臼とはその前に連携しているわけだし、観光客や人もそういう動きをしていてなぜかという支庁の違いですからね。早くこちら側も仲間に入ればいいという気がします。

最後に石田先生に、今後の方向とか、全国のいろんなところからの期待みたいのを肌で感じておられるので、そのことも含めて、エールを贈っていただき、締めにしたいと思います。

石田 シーニックバイウエイは、九州、関西、関東でも始まりましたが、先行者の意味で北海道は非常に注目されています。九州からの視察者に聞くと、ああいう熱い人がやっている、やっぱりすごいですねと感心される。その人たちをどう探すのかという、行政の人はそういう思いで帰られるわけです。そういう感覚がすごく大切だと思います。苦労したこと、こういうふうにしたいと思っていることを、これからは伝えるという役割が重要になってきます。また、依存しすぎは良くないですが、やはり専門家に任せる方が、情報や知恵をもっていますからうまくできることがある。その意味では支援センターはさらに充実強化が必要です。

また、皆さんが行政に対し、遠慮せずになんが言った方が、垣根を越え、地域もシーニックバイウエイもよくなり、北海道発で日本全体がよくなっていくと思います。

奥平 第1回指定の3ルートの皆さんには、シーニックバイウエイの先導者として、ますます頑張ってくださいと思います。本日はありがとうございました。

(本座談会は、平成17年8月9日に札幌で開催。概要を国土交通省広報誌『国土交通』9月号「北からの発信・シーニックバイウエイ北海道の挑戦⑥」に掲載しています)